

札幌市中高一貫教育校設置基本構想 概要版

(本書を6ページにわたり要約しています。)

I 中高一貫教育校の設置について

1 中高一貫教育の制度

◆ 中高一貫教育制度の導入

現在の中学校・高校の制度に加えて、中等教育の一層の多様化を推進するものとして、学校教育法の改正により制度化され、選択的に導入することが可能となりました（H11.4より）。

◆ 中高一貫教育校の形態と特色

中高一貫教育校には、1つの学校として6年間一体的に中高一貫教育を行う中等教育学校（一体型）、高校の入学選抜を行わずに同一の設置者による中学校と高校を接続する併設型中学校・高校などがあります。一体型は併設型と異なり、他の中学校から高校段階への入学枠はありません。

※ 連携型という形態もありますが都市部には馴染まないと考えられます。

2 札幌市における検討経過

H15 「札幌市立高等学校教育改革推進計画」策定

→単位制や特色ある学科等の導入、新しいタイプの定時制高校の設置などとともに、中高一貫教育校の設置検討についても計画に位置付け。

H16 「札幌市教育推進計画」（主に義務教育段階における指針）策定

→中高一貫教育校の設置に向けて検討を進めることを記載。

H19 児童生徒・保護者アンケートの実施

→約70%の保護者が公立の中高一貫教育校に関心を示し、約58%の保護者が入学させたいと回答。

H20 「札幌市中高一貫教育検討協議会」設置

→H21.5に設置に向けた検討が望ましい旨の答申書をまとめる。

3 札幌市における中高一貫教育校設置について

◆ 中高一貫教育の特徴

○ 6年間を見通した柔軟な教育課程の編成を行うなどの「6年間を通した学びの連続性」

○ 幅広い異年齢集団で学習活動等ができるなどの「幅広い異年齢集団による学び合い」

○ 6年間を通して生徒を支援することができる「6年間にわたる見守り」

◆ 中高一貫教育の特徴を生かすことで、これまで以上に特色ある学習環境を提供することが可能であり、私立に加え公立の中高一貫教育校という新たな選択肢を提供することは、市立高校改革が目指す学びの場の更なる充実につながると考えます。

◆ 中高の教員が日常的に協力して教材研究や学習指導を行うことができる中高一貫教育校が、中学校と高校の橋渡しを行い、中高一貫教育校を含めた3者が、様々な成果を共有し、互いに高め合う取組を推進することで、札幌市の中等教育の一層の充実を図ることができると考えられます。

⇒ 以上のことから、札幌市立の中高一貫教育校を設置することとします。

※ なお、設置に当たっては、少子化の進展による中学校卒業生数の減少を考慮し、新たに学校を増設するのではなく、既存の市立高校の特色ある教育内容をベースに発展的に改編します。

II 育てたい生徒像と改編対象校について

1 育てたい生徒像

- ◆ 6年間の連続した学びを生かして、札幌で学んだというアイデンティティを持ち、将来の札幌や日本を支え国際社会で活躍する知・徳・体のバランスのとれた「自立した札幌人」。

2 育てたい力とはぐくみたい心

◆ 育てたい力（自立の基礎力）

課題発見・解決力、思考力・判断力・表現力、自らの将来を切り拓く力。

◆ はぐくみたい心（札幌人）

札幌に愛着を持つ心、地域に貢献する気持ち、豊かな人間性、魅力ある個性、国際的な視野。

3 改編対象校選定の考え方【改編対象校：開成高校（コズモサイエンス科）】

- ◆ 中高一貫教育の特徴を生かすことで、「将来の札幌を支え国際社会で活躍する自立した札幌人」を育成することに加え、現在進めている特色ある教育内容が発展・充実する市立高校であることが条件であると考えます。

- ◆ 小学校卒業段階から入学してくる生徒の多様な進路希望を想定し、文系・理系を問わない多様な学びのできる教育内容をもつ高校であることが適当と考えます。

- ◆ 開成高校コズモサイエンス科は、実験・観察等を通して、論理的思考力や発信型の英語力を身につけ、文系・理系を問わず様々な分野で活躍する人材の育成を目指しており、中高一貫教育校に改編することで、自然科学をはじめ、社会科学や人文科学を表す広い意味の「サイエンス」を、より深くバランスよく学ぶことが可能です。

- ◆ 加えて、市内全域からのアクセスや施設整備の財政的観点からも適当です。

⇒ 以上のことから、改編対象校として最もふさわしいのは開成高校と考えます。

- ※ 校名や校歌の継承を含め、改編対象校の伝統を踏まえつつ、新しい学校づくりを進めていくことを考えています。

III 中高一貫教育校の教育内容等

1 中高一貫教育の特徴を生かした教育内容

- ◆ 札幌市が設置する中高一貫教育校は、開成高校コズモサイエンス科の教育内容と中高一貫教育の特徴を融合させ、特色ある教育内容を実施することが可能であり、探究心に富んだ生徒やじっくり考えることが向いている生徒に対して、更に充実した学びの場の提供が可能です。

(1) 「6年間を通じた学びの連続性」を生かした取組

① 課題探究的な学習の発展・充実

6年間じっくりと課題探究的な学習に取り組むことができる環境を生かして、その中で発信型の英語力の活用を図りながら、課題探究的な学習全般の発展・充実を図ります。

② 進路探究学習の更なる推進

地域の人材や団体などと連携したインターンシップをはじめとする体験的活動を含め、6年間を見通した系統的、計画的な進路探究学習プログラムを構築することにより、学ぶ意欲の向上や、自らの将来の社会的自立や生き方を主体的に考え、自らの将来を切り拓く力を育てます。

③ 札幌を教材とした学び

発達段階に応じた、「札幌らしい特色ある学校教育」の3テーマ（雪・環境・読書）を教材とする学習や地域の教育資源の活用、地域活動への参加等により、「ふるさと札幌」への愛着と札幌人としてのアイデンティティを醸成するとともに、地域に貢献する気持ちをはぐくみます。

(2) 「幅広い異年齢集団による学び合い」を生かした取組

① 特別活動等における異年齢集団による活動の重視

学校行事などの特別活動や部活動において、幅広い異年齢集団による活動を重視することにより、生徒の主体性やリーダーシップ等を育て、豊かな人間性をはぐくみます。

② 異年齢集団による学び合いによる学習意欲の向上

高校段階の生徒が中学校段階の生徒にアドバイスや支援をするなどの「教え」「教えられる」場を設定することにより、理解を深めることや責任感をはぐくむとともに、身近な目標として上級生の活動に触れることにより、生徒の学習意欲の向上を図ります。

(3) 「6年間にわたる見守り」を生かした取組

生徒が試行錯誤を繰り返しながら学び、成長していく過程を、中高の教員が6年間継続して見守ることにより、生徒一人ひとりの長所や個性を発見し、より伸ばすことができます。

2 発達段階に応じた指導区分の設定及び単位制の導入

◆ 中高一貫教育は、中学校3年と高校1年の接続に意義があることから、6年間の発達段階に応じて、基礎期、充実期、発展期の3段階の指導区分を設定します。

◆ 高校段階から単位制を導入し、特に発展期において、大幅な科目選択を可能とし、生徒の多様な興味・関心等に対応します。

高校段階	6年生	★ 発展期 ○ 4年間の学びを踏まえ、より高度な課題探究的な学び ○ 単位制を活用し、学びの多様化や進路の多様化に対応
	5年生	
中学校段階	4年生	★ 充実期 ○ じっくりと腰を据えた課題探究的な学び ○ 中高の継続性を生かした学習活動の展開
	3年生	
	2年生	★ 基礎期 ○ 基礎・基本の習得 ○ 実験・観察等の学習手法の体得 ○ 先輩たちとの学びによる学習意欲の向上
	1年生	

3 他の中学校・高校との教育成果の共有

- ◆ 中高一貫教育校においては、中学校教員と高校教員が日常的に協力しながら教材研究や学習指導を行うことにより、中高の連続性を意識した実践研究が可能です。
- ◆ 中高一貫教育校が中学校と高校の橋渡しを行い、中高一貫教育校を含めた3者が、様々な成果を共有することで札幌市の中等教育の一層の充実を図ることができます。

4 魅力ある学校づくりに向けた取組

- ◆ 相互に授業を持つことも含めた、中・高教員一体となった学校運営。
- ◆ ゲストティーチャーを招いての授業など、地域の教育力の活用。
- ◆ 最先端の学問研究など「ほんもの」に触れる機会を提供するなどの、大学等との連携。
- ◆ ネイティブスピーカーの活用、海外見学旅行、交換留学など、異文化交流の機会の充実。

IV 中高一貫教育校設置の枠組

1 設置形態 : 中等教育学校 (一体型)

- ◆ 生徒全員に対して共通した教育課程で系統的、継続的な指導が可能であり、6年間の積み上げ効果を最大限発揮できます。(学習面)
- ◆ 高校段階からの入学枠がない一体型は、6年間にわたってじっくり生徒の成長を見守り育てるという利点を全ての生徒が享受できます。(生活面)
- ◆ 中高の教員が一体となった学校運営を行いやすいという特徴があります。(学校運営面)

2 学校規模 : 1学年4学級 (総学級数24学級)

- ◆ 中高一貫教育のメリットを最大限生かすためには、中学校部分と高校部分の一体的な学校運営ができ、生徒全体を把握できる学校規模とすることが重要です。
- ※ 札幌市における適正規模は、中学校1学年4～6学級、高校1学年4～8学級。
- ※ 全国で既に設置されている国公立の中等教育学校32校においても、総学級数24を超えるところはありません。

3 通学区域 : 札幌市内

- ◆ 中高一貫教育を望む市内の児童に対して公平に入学の機会を提供するため札幌市内とします。

4 開校時期 : 平成27年度

- ◆ 高校部分については、現行1学年8学級から4学級に学級数が減少することから、学級減の影響を緩和するため、開校時期は中学校卒業者が大きく減少する時期が適当です。

＜参考＞札幌市内の中卒者推移（北海道教育委員会調べ）

年度	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年
中卒見込数	16,348	17,060	16,204	16,363	16,147	16,145	15,677	15,531	15,753
前年比増減	▲460	+712	▲856	+159	▲216	▲2	▲468	▲146	+222

※ 平成25年度までは、北海道教育委員会により「公立高等学校配置計画（平成23～25年度）」が策定されており、高校の学級数の増減に関する見込みが示されています。

※ 住民基本台帳を基にした札幌市の人口統計によると平成30年度以降も少子化の進行が見込まれています。

5 入学者の決定方法

- ◆ 学力検査を行わず、適性検査、作文、面接、調査書、抽選など複数の方法の中から選択のうえ、適切に組み合わせて実施することとし、受験競争の低年齢化を招かないよう留意します。今後詳細に検討し、開校前年度までに公表します。
- ◆ 入試日程については、私学関係団体と話し合いを行うなど、関係機関と調整のうえ、決定することを考えています。

6 中高一貫教育校設置に伴う移行期間

- ◆ 一体的な学校運営体制を確立することや幅広い異年齢集団による学び合い等の中高一貫教育の効果を可能な限り早期に発揮することなどを目的に、平成27年度～29年度の3年間のみ、高校段階からの入学生を、中等教育学校後期課程の生徒として募集します。
- ◆ 移行期間における後期課程入学生についても、前期課程同様、通学区域は札幌市内とします。

＜参考＞中高一貫教育校移行期間

				27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
中学校	1年	中等教育学校	1年	4	4	4	4	4	4
	2年		2年	4	4	4	4	4	
	3年		3年	4	4	4	4	4	
高校	1年	4年	4	4	4	4	4	4	
	2年	5年	8	4	4	4	4	4	
	3年	6年	8	8	4	4	4	4	
学校規模				24	24	24	24	24	24

- 中等教育学校の前期課程（中学校段階）からの入学生
- 中等教育学校の後期課程（高校段階）からの入学生
- 開成高校生

※ 表の数字は学級数を表す（1学級当たり40名の場合）

V 中高一貫教育校の施設整備の考え方

1 施設整備の基本的な考え方

- ◆ 改編対象校である開成高校の校舎は老朽化が進んでいることから全面改築で整備します。

2 開校までの施設整備のスケジュール（予定）

- ◆ 平成23年度 : 施設整備に係る基本計画の策定
- ◆ 平成24年度 : 基本設計・実施設計
- ◆ 平成25年度 : 新校舎建築工事着工
- ◆ 平成26年度 : 新校舎竣工（平成27年4月開校予定）
- ◆ 平成26～27年度 : 既存校舎の解体、グラウンド造成

※ 上記スケジュールは、基本設計等を行う中で変更の可能性があります。

VI 課題・留意点への対応等

1 課題・留意点への対応

◆ 受験競争の低年齢化への懸念

入学者の決定方法については、学力検査を行わず、適性検査、面接、抽選等を適切に組み合わせ、受験競争の低年齢化を招かないよう留意します。

◆ 受験準備に偏した教育への懸念

実験・観察・体験等を重視する学習を想定し、受験準備に偏したカリキュラムは想定していません。

◆ 生徒集団の固定化への対応と進路変更の保障

相談体制の充実に加え、他の高校への進学の道も保障します。

◆ 心身発達の差異の大きい生徒への対応

中高教員の連携を促す取組や施設整備を行います。

◆ 小学校卒業段階の進路選択の困難性（多様な進路希望）

中高一貫教育校の特性を十分周知するとともに、多様な進路希望に対応します。

◆ “中だるみ”への対応

生徒が興味を持って取り組める学習の場を提供し、高い意欲を持続させます。

◆ 中学校段階におけるリーダーシップの育成

原則、6年間一体的な活動を基本とするが、発達段階に応じたリーダーシップの育成を考慮し、中学校段階・高校段階別々の活動も工夫します。

2 今後の進め方

- ◆ 今後学校づくりに向けて具体的な検討を進め、適切な時期に説明会を開くなど情報提供を行っていきます。

3 評価と検証

- ◆ 中高一貫教育校の設置後、教育効果について十分に評価・検証を行います。